
ノスタルジア～刻のオルゴール～

碧風凜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジア〜刻のオルゴール〜

【Nコード】

N0252W

【作者名】

碧風凜音

【あらすじ】

高2の俺は、校外の友人とバンドを組んでいた。

学校からバンドの練習に向かう途中、「あいつ」が駆け寄ってきた。あいつは天性のアレンジャーで、オルゴール職人に中2の頃から弟子入りしている変わり者。

そんなあいつがアレンジした曲でプロデビューが決まった俺達は、スタジオで練習を始める。

そして翌日、練習がないその日。俺とあいつは一緒に弁当を食べながらだべっていた。

甘酸っぱい古いラブコメ目指して邁進中です。

ジーツ、ジーツ、ジーツ

螺旋^{ねじ}が回る。

ジーツ、ジーツ、ジーツ

螺旋^{ねじ}が回る。

止まる螺旋^ねの音 流れ出すメロディ。溢れるほどに零れていく音、音、音。

螺鈿細工^{らでんさいこう}の螺旋^{らせん}の螺旋^{ねじ}巻き機械。そこから零れるメロディは、それを聴くものの心を癒す。そして、心に刻まれるだろう。人を超え、時を超えて。

「おい、待ってよ。待ってたらあ」

校門をでようとした俺に制止の声がかかる。振り返ると、あいつが下足場から走ってきていた。全力で。

俺は止まってあいつを待つ。身長は同世代の中では低め。髪はショートでボーイッシュ。着ているのは学校標準の夏服で、ぴしっと着こなしている。

「ねえ、新曲できたんだよね？ 楽譜見せて」

なるほど。それであいつは全力疾走してきた訳か。

俺は校外の友人とバンドを組んでいる。俺はヴォーカルとギターで、ついでに作詞作曲もやっている。それで、あいつにはいつも編曲を頼んでいる。

「いいけどさあ……」

嫌そうな表情をしながらあいつに楽譜を渡すけど、実のところは嬉しいのだ。何しろあいつのアレンジは天才的だ。俺たちのバンドが大きく伸びているのも、あいつの力があればこそだ。

「ふーん。いつもながらいいい出来だね。僕こういう曲好きなんだー。アレンジがんばるから、期待して待っててよね！」

「おう、任せた」

「うん、任せられた」

くだらないジョークに笑いあう俺たち。いつもながら、こういう瞬間はいいよなーと思うてしまう。ま、そんな感じでだべりながら、俺たちは帰り道をゆつくりと歩いていった。

「それにしてもさあ、君の作る曲はどうしてこうも僕の感性にマッチするんだろうね？ 相性がいいのかな？」

「かもな。けどそう言うおまえもそうだぜ。いつもいつも最高の編曲をしてきてくれるからなあ。どんなアレンジでもいい感じに仕上がるんだから、おまえもすごいよ」

さっきもいったけどこいつはもう天賦の才を持った天性的なアレンジャーだ。この道で本格的に営業かけたらあっさりとのし上げられるレベルだ。そんなやつが俺のバンドの専属つてのはかなり恵まれている。

「えへへ……そう素直にほめられると照れるなあ」

「おう、照れる照れる。でな、次の曲は歌詞もできているんだよ。こいつ見てくれ」

そう言つて次の曲の楽譜を見せると、あいつはそれを見ながらその場で歌い始めた。

「ちよっ、おい……」

俺は止めようとするが、あいつはそれにかまわずに歌い続けた。音楽のこととなると周囲が見えなくなっちまうのはあいつの良い部分ではあるが、行き過ぎると危険だ。

「がっ！」

ほらな、電柱にぶつかりやがった。どんなギャグ漫画の住人だよお前は。

「いったーっ！」

「ちゃんと前を見て歩かないからだよ。ん……血が出てるな、ちょ

つと待ってる」

俺はポケットからハンカチを取り出しあいつの頭に当てた。

「あ、ありがとう……」

まあ、ちよつと切れただけの軽い傷だな。

「ほれ、しばらく頭押さえてな。そうすればすぐ血は止まるよ」

「あ、うん。あとでハンカチ代払うから。それいくらした？」

「ん？ 百円均一の安物だよ。金はいらないから曲の方頼むぜ」

「えっ？ あっ、いいの？」

「ああ」

「あの……その……ありがとう。大切にするね」

うわ、うつむいて上目遣いで言いやがった。これは、ちよつと反則だ。

「あー。焼くなり捨てるなり好きにしろ」

情けない。声がうわずった。

「うん。好きにするよ」

あいつはそう言う俺の背中をぽんと叩いた。

「さ、帰ろうよ。今日はバンドの練習あるんでしょ。見に行つていい？」

俺はちよつとテレながらいいぜ、と答えた。断る理由はない。

「やった。久しぶりに生音が聞けるや。あーっ。何週間ぶりだろ……」

……

「そんなにあつちのほう忙しかったのか？」

「うん。制作が佳境に入っていたからね。一応完成したから、今日君に声をかけたわけさ」

そういつて笑うと、あいつは鞆から小さな箱を取り出す。

「これか。結構小さいな」

「まあ、いいから聞いてよ」

あいつはそう言つと、小さな箱の裏のぜんまいを回し、そして蓋を開いた。すると、心地よい音楽が流れてくる。

そう、これはあいつが作ったオルゴールだ。

あいつは子供の頃からオルゴールが好きで、中二の時に町はずれに住んでいるオルゴール職人に弟子入りした。そして高校二年生になった今でも修行は続けている。

天賦の才とオルゴール職人の下での修行。それがこいつのアレンジに良い影響を与えている。

それだけに、それだけに、このアレンジはすばらしい。単調な「さくら」にこんな解釈があつたなんて！音がかなり加えられているが原曲の良さは全く損なわれておらず、主旋律を引き立てている。「さすがだなあ。このアレンジはすごいわ。逆立ちしても勝てないな……」

「ふふ……おだてられても何も出ないよ」

「それでもいいさ。改めておまえのアレンジが天才的だと証明されたわけだからな。新曲の出来も決まったようなもんだろ」

「そうだね。そこは僕の手腕に関わってくるわけだけど、任せておいて」

「任せるさ。ところでだな、朗報があるんだが聞かないか？」

「なに？聞きたい。っていうか聞かせて！」

プロデビューが決まった。この一言を伝えるのに何分かつただろうか。まるで恋の告白でもしているように、焦ってうまく言葉に出来ない。まったく、何をやっているんだ俺は。

「すごい。プロデビューするんだ！」

「まあ、当分は学業優先だけだな」

まあ、高校ぐらい出ておかないと音楽の世界でつぶれた時に後がない。そんな考えもあつたが、学校の友達と遊べなくなることが不満でもあつたから、事務所の社長にそう条件を付けた。

社長はしばらく考えた後、許可をくれた。まあ、その代り週二でレッスンだけどさ。

「でも、そうしたらますます会えなくなるね。僕も師匠のところに行かなきゃならないし、さすがにプロのレッスンを見学するわけ身も行かないし……」

「ばあつか。そんなの気にするなよ。編曲で登録されてるから、お前もメンバーだよ」

その言葉に、あいつは驚いて動きが止まった。

「やったあ。これで君たちの曲聞きほうだいだ。」

そして一気に爆発させる。

「……おまえなあ。まあいいけどさ。とりあえずアレンジャーとしてスタジオに詰めてもらうことになると思う」

「アイアイ・サー。で、今日はスタジオで練習？」

「いや、今日はいつもの楽器屋の地下ホールさ。ところで、しばらくは顔出せるのか？」

「うん。夏休みまではね。新曲ができたって聞いたから、師匠に休みをもらってきたんだ。その代り夏休みは週四日間は修行だけだね」
「大変だなあ。一日中か？」

「もちろん。シリンドー式って呼ばれている西洋の古いタイプのオルゴールに挑戦するんだ。今のオルゴールと違ってすごく精密だから、夏休みだけじゃ終わらないだろうね」

「ほー。そりや大変そうだ」

「でもやりがいはあるよ。今回はいつもの練習用じゃなくて、自分の好きな曲を入れて良いって言われているから、実は楽しみなんだ」
あいつの好きな曲か……… いったいどんな曲をオルゴールにするつもりなんだろう。どうやら大作になりそうな具合だし、非常に楽しみだ。

そうこう言っているうちに目的地に到着した。

「ちわーっす、みんな来てます？」

楽器店の店長が中にいたので挨拶する。

「ああ、来てるよ。十五分くらい前には到着してたね。ところで君が来ているってことは……」

言葉の後半はあいつに視線を向けながら言った。

「もちろん新曲ができたってことですよ」

「ほう。それは期待できそうだな。聞いたぞ、プロデビューするん

だろ？」

「そうらしいですね。僕はあまり実感ないんですけど」

店長とあいつがだべっている。だが練習時間は有限だ。おしゃべりをやめてもらおう。

「おーい、そろそろ行くぞ」

「あつ、待つてっば」

「お前がたらたらしているからだ。そんじゃ店長、よろしく」

「ああ、頑張ってくれ」

「ういーっす」

店長に会釈をして、地下ホールにつながる階段を下りていく。

この店の地下ホールはアルコールを販売していないソフトドリンクと軽食だけのバー式ライブハウスだ。アルコールを販売していないおかげでお役所関係の目も甘く、こうして高校生たちの俺たちでもバンドの活動をすることができる。

学校には軽音部もあるが、学外の人間は入り込めないので軽音部には所属せずに自分たちでバンドを作ったってわけだ。で、定期的にライブもやってる。

二カ月に一回のペースだが、新曲がうまくいった場合にはゲリラライブをやることもある。

このホールでのライブは夜だけ開催され、楽器店を閉めてから降りてくる店長がバーテンをやりながらライブが行われる。音響や照明なんかは専属のスタッフがこなしてる。

楽器は自分のものを持ち込むこともできるし、店の物をレンタルすることもできる。たいていギターなんかは自分で持ち込むが、ドラムやシンセサイザーみたいなでかいやつはレンタルしている。

「ここに来るのも久しぶりだなー。春のライブ以来かな？」

今現在は7月なわけだが、あいつは今までオルゴールの修行が忙しくて前回のライブには顔を出せなかった。

自分たちの演奏を一番聞かせたい奴が不在だったのは残念だったが、あいつが編曲してくれた新曲のおかげで音楽プロデューサーの

目にとまりデビューが決まったのだから、ある意味一緒にセッションをしていたといえなくもない。

「すまん、遅くなった」

ホールに入った俺は、先に来ていた仲間に声をかけた。

「おー、来たか。二人一緒ってことは曲のほうはうまくいつてるってことだな？」

ドラムの斎藤が音出しを止めて返事してくれた。

「ああ、ばっちりだ。期待してくれてていいよ。でだ藤森、お前にはこいつの作詞を頼みたいんだが」

ベースの藤森に、まだ歌詞ができていない曲の楽譜を渡す。藤森の作詞はバラード系に強い。だから今回の曲もバラードだ。藤森の作詞でいっただんな歌になるのか……出来上がりが楽しみだ。

「了解。どれどれ……」

藤森は楽譜を見るとメロディラインを鼻歌で追いかける。

「なるほど。これはコブシが入るな。演歌風のバラードになりそうだが」

「演歌風のバラードか……いっただんなんだそれ？」

キーボードの木崎が藤森に聞く。

「まあ、情念系？ とりあえず作ってみないととはつきりとしたことは言えないがな」

「情念系か。女ヴォーカルがほしいところだな」、と木崎。

「ああ、そこらへんは問題なし。ちゃんと男用に作るよ」

「男で情念系か……曲を作っておいて何だが、非常に微妙だな」

と俺が言つと、

「なに、歌うのはお前だ。気にするな」

藤森がフオローになってないフオローをした。ったく、こいつは

……

「まあいい。とりあえず練習に入ろう。事務所がデビュー曲を作ってきてくれたからとりあえずそいつを聞いてくれ。今までの俺たちの流儀とは違うがそこんこは仕方がない。この曲が当面最優先さ

せる曲だ」

カバンからMP3プレイヤーと小型のスピーカーを取り出すと、事務所からデータで渡されたデビュー曲を流す。ついでに全パート分の楽譜を渡す。

「んお、結構いい曲じゃね？」

曲を聴きながら木崎が俺に言った。

「そらそうだ。プロの音楽屋がCMタイアップ用に作った曲だぜ。俺たちが作るものとはレベルが違うよ」

「でもさー、それじゃ俺たちのカラーが出せないじゃん」

「問題ないよ。こいつのカップリング曲は俺たちが作っていいことになってるから、そっちで俺たち本来の音楽を聴かせればいいさ」
「なるほど。で、カップリングの曲はどうするんだ？」

藤森が聞いてくる。それに答えて俺は全員に楽譜を手渡した。ここに来る途中であいつに見せた新曲。それをデビュー曲にぶつける。
「ふーむ。で、これをいつもどおりあいつがアレンジするわけだな？」

「ああ。夏休みに入るまではこっちに顔出せるみたいだから、それまでに編曲してもらう。できるよな？」

木崎の言葉に俺はそう言った。

「うん、まかせて。デビュー曲よりいい曲に仕上げて見せるよ。詞も曲も良いからね、あとは僕しだいだよ。この曲に関してはもう頭の中にイメージがあるから、すぐに作ってみせるよ」

あいつは笑ってそう言った。あいつがこういう顔をするときは自信が有るときだ。期待して問題ないだろう。

「じゃ、練習を始めるか」

そういつて俺はホールに備え付けのエレキギターを取り出す。すでに全ての準備が終えてありいつでも弾ける状態にあるのでこのホールに来るときはいつもこのギターを使ってる。

「ほい。やるのはこのデビュー曲でいいんだな？」

「ああ。頼むぜ斎藤」

「了解」

斎藤がスティックを叩いてリズムを刻むとベースの藤森がそれに続いてベースラインを奏で出す。

そしてキーボードの木崎とギターの俺でメロディを弾く。

とりあえず今回は歌なしで一回通してみる。

初見で弾くくらいのレベルならとりあえず問題なしにこなせるのが俺たちなので、事務所がよこした俺達の流儀とは違うデビュー曲でもだいたいなんとなく、でやれてしまう。

「おっけー」

で、弾き終わったので一旦手を止めて感想を言い合う。

「んー、とりあえず弾きやすい曲であるのは確かだな。そこらへんは作った人が俺たちのレベルに合わせてくれたのかな？」

「じゃねーの？ デモCDに今までの曲まとめて渡したから」

木崎の言葉を肯定する。確かに、弾きやすい構成の楽曲ではあった。

「あれだ、斎藤、ちょっとリズム早い。もう少し抑えてくれ」

ベースの藤森がドラムの斎藤に注文をつけると、斎藤は

「そうか？ おーい、どう思う？」

とあいつに尋ねる。

「うん……この楽譜を見る限りだと、もう少しリズム抑えたほうがいいかもね。それから、ギターはもう少し情熱的に。なんのCMかは知らないけど、タイアップでしょ？ もうちょっと……うーん、なんていうかな、『聞いたことのあるメロディ』でありながら『全く新しいメロディ』にしないといけないと思うよ」

「なんだそれ、面倒くさい」

あいつのツツコミに俺がそう言うと、あいつは「まあ、僕も理論を勉強したわけじゃないからね。作曲とか編曲の作法なんて知らないよ。でも、さっきの演奏だと、作った人の意図とはズレてる気がするんだよね」

と答えた。

「なるほどね。なあ、なんのCMとタイアップとか情報全くなーの？」

「車だったかな？ Bメロからサビが使われるらしいから、とりあえずそこを重点的にやってくれとは言われてたな」

キーボードの木崎の質問に俺はそう答える。

「だったらさ、ドラムとベースは少し抑えて。キーボードは少し走って。で、ギターは情熱的に。これにボーカルを入れると、いい感じになると思う」

「了解。じゃ、そんな感じでもう一回通すか。今日は演奏だけな。歌を合わせるのは来週にしよう。歌詞まだ覚えてないから」

「わかった。それじゃあ、もういっかい行くぞ」

あいつのアドバイスを受けて、斎藤がドラムのリズムを抑え目に取る。

何回か練習して、俺たちは解散した。

翌日。

俺たちは学校の昼休みに屋上で一緒に弁当を食っていた。

「ねーねー、その卵焼きもらっていい？」

「あ、いいよ」

俺がそう言うときあいつは俺の弁当箱から卵焼きを強奪していった。

「んじゃ、俺はそのウィンナーもらっわ」

「おっけー」

そしてウィンナーをあいつの弁当箱から奪う。

「ねー、君の新曲、Bメロまでアレンジしてきたよ」

「お、仕事早いな。さっすが」

俺がそう言うときあいつは照れて舌をぺろっと出した。

「夏休みまであと二週間もないからね。7月の半ばにはもう夏休みでしょ。したらまた師匠のところにこもりつきりになるから、早めに君のうたが聴きたくて……」

顔を真赤にして、そんなことを言うあいつ。

くそつ。なんか可愛い。

「そーいやそうだな」

だから俺はそう考えたのを悟られないように、努めて平静な声出しをした。

「でさー、聞く？」

「聞く聞く」

何が、とは聞かない。そんな事わかりきっている。

で、あいつは胸ポケットからMP3プレイヤーを取り出す。

喉からこぼれ落ちた汗が下の方に流れて行って目を奪われたのは内緒だ。

「ほら、イヤホンして」

あいつはイヤホンのRの方を俺に渡して自分はLの方を耳につけ

る。自然と体がくつついた。なんかこー、ドキドキする。

汗の匂いに混じって甘い香りが漂ってくる。が、あいつはそんなことはお構いなしにMP3プレイヤーのスイッチを押した。

と勝手に世界が変わる。

ドラムとベースとキーボードとギター。それにあいつの歌声の入ったデモ音源が俺の世界を支配する。

忘れてた。

あいつは美声だった。アレンジャーなんてやってるからもちろん音程も完璧だ。

そんなあいつが歌った甘くさいラブソングは、まるであいつから告白されているかのような妙な気分を俺に味合わせたのだった。

そしてBメロが終わるとあいつは音を止める。

で、俺の目の前に来て俺の耳からイヤホンを外していった。

汗で透けて見えてドギマギする。

が、あいつはそんなことはお構いなしに俺の横に座った。

「どうだった」

「まったく別物だった」

「え？」

「俺が思い描いていたのとまったく別の世界だった。もちろんいい意味で」

なるべくさっきの一連の流れは無視しておいて、音楽の感想だけに専念する。じゃないと変な方向に行っちまいそうだ。

「そっか」

俺の言葉に、あいつは嬉しそうに言った。

「えへへ、うれしいなあ」

そう、心底嬉しそうに。

「お役に立てたなら幸いだよ」

明るいい声であいつはそう言った。だから、俺は気がつかなかったんだ。

「で、この路線で問題ない？」

「ああ、問題ないぜ。このまま最後まで頼む」

「うん。もちろん最後まで……さて、お弁当の残り食べようっと。お昼休みなくなるよ」

「おう、そうだな」

そうして、俺たちは弁当を食いながら雑談を繰り広げた。主に音楽に関して。

放課後。今日は練習はない。だから、俺はあいつと一緒に、ゆっくりと帰路についた。

踏切間際のコンビニ。あいつは買い物があると言って中に入ってしまった。

「何買うんだー？」

「赤牛。これがないと集中力がでないんだよねえ」

「翼をさずける。ってか……これなんか麻薬成分入っているとかいふ噂なかったっけ？」

「それは海外の自家版だよ。日本のは成分変えてあるから大丈夫。まあ、カフェインが入っているから、飲み過ぎると危ないのは確かだけどね。一日に一本くらいなら問題ないよ」

「そっか」

「うん。あとアイスも買おう。暑くてやってらんない」

確かに。今日も路上の温度計は摂氏三十度を記録している。

「じゃ、カウンターでかき氷作ってもらおうぜ」

「あ、いいね」

ということとで合意が形成され、俺たちはカウンターに向かった。

「すみません、かき氷2つ。僕はブルーハワイ。君は？」

「俺？ あ、メロンお願いします」

「かしこまりましたー」

愛想がいいおばさん店員が、会計をしてあいつが金を払う。俺も自分のかき氷の代金を払おうとしたが

「あ、僕がおごるよ」

と言つてあいつは譲らなかつたので、おごつてもらつことにした。で店員さんが必死にかき氷を作るのを待つこと三分。俺たちはそれぞれかき氷を手にし、コンビニを出て踏切をわたり、近くの公園のベンチに腰掛けた。

「さて、いただきまーつすと」

あいつはこんな炎天下だというのに元気に挨拶すると、かき氷を一気に食べ始めた。

「おいおい、そんな一気に食べると……」

「がっ……頭いたい」

「ほらな……」

俺は半ば呆れ顔であいつのを見る。真面目なんだが何処か抜けたところのあるやつだ。

「少し落ち着けー。その間に俺はゆっくり食うから……ん、うめー」
夏にかき氷はやっぱり最高だ。

「ふー。落ち着いた。あ、ネタが降ってきた。ちょっとかき氷持つてて」

「お、おう」

あいつは鞆から電子メモ帳ポメラを取り出すと、英字キーボードのままでコードを書き始めた。

俺はあいつから受け取ったかき氷をベンチの開いているスペースに置いて、自分のかき氷を食べ始める。

が、この暑さではかき氷はどんどん溶けていく。

「おい、早く食わないと溶けちゃうぞ？」

「あー。じゃあ、公園の水道に捨てておいてよ。今いいところだから邪魔しないで」

「あいよ」

とりあえず俺は自分のかき氷を全部食べてから、ほとんど溶けきったあいつのかき氷を水道の排水口に流すと、ゴミ箱に空容器を捨てに行った。

「よっし、できた！」

あいつの歓声が聞こえる。どうやらかき氷を食べて頭痛を起こしたついでに脳の回路がどうにかなったらしい。

「できたって編曲か？」

「うん。全パートぱっちり。じゃない、バッチリ。明日までには録音と譜面の印刷終わってるから、明日にでもメンバーに招集かけといて」

「了解。楽しみにしてるぜ」

「うん。楽しみに待ってて」

あいつはそう言っポメラの電源を切って折りたたむと、鞆にしまった。

「んじゃ、僕帰るね」

「おい、急だな。もうちょっとゆっくりしていこうぜ」

「ごめん。すぐに形にしてあげたいんだ」

「……そつか。じゃ、また明日な」

「うん。また明日」

あいつは元気にそう言っト、炎天下の中を走って帰っていった。熱中症を起こさなきゃいいけどな。

それから、俺はスマホでバンドのメンバーに招集をかけて全員が集まれることを確認すると、スタジオを抑えた。

「さて、俺も急いでデビュ曲の方の歌詞覚えなとな。両方共あいつに聞かせてやりたいし」

そして俺も家路についた。

それから、俺は家に帰ると二階の自室でパソコンを立ち上げる。夕食までは二時間あるから、その間にメールチェックをしてまとめサイトビューアーでまとめサイトを見て回って、ついでにツイッターで情報収集。それからマイスペースに音源をアップロードする。するとあいつのスカイプがオンラインになったのでメッセージを送ってみる。ちなみに俺のHNはハッピーイルカ、あいつのHNは蓬萊山蓮華だ。

ハッピーイルカ：いよう

蓬萊山蓮華：やあ

ハッピーイルカ：どうよ

蓬萊山蓮華：いま録音終わった。

ハッピーイルカ：早いな。一時間かそこらじゃないか。

蓬萊山蓮華：今の僕には翼がある（笑）

ハッピーイルカ：あはは

蓬萊山蓮華：で、合成今してるから、あと三分ほど待って。

ハッピーイルカ：らじゃ

蓬萊山蓮華：音声通話に切り替える？

ハッピーイルカ：そうだな

蓬萊山蓮華：おっけー。

そしてあいつからコールされる。

俺はそいつを受信するとヘッドセットをつけた。

「こんばんは」

「おつす。そういえばこうやって話すのは久しぶりだな」

「そうだね。ずっと師匠のところに詰めていたからね。あそこだとネットもできないからねー。まあ、その分オルゴールに集中できるんだけど」

「ネットもないっつーのは不便だな。ほんと、お前の師匠偏屈だな。まだ三十代なのに」

「ほんとほんと。そういえばさ、あの伝説の世代交代RPGが復活するの知ってるかい？」

「知ってる。でもあれが発売された時って俺ら四、五歳だぜ？俺やったことないけどあれ面白いのかな？」

「さあ？僕もやったことないよ。でもサントラは中古で買った。あと小説も読んだよ。音楽がいいんだよね。あのゲーム。だから、

実際にどんなシーンで音楽が使われてるのは見てみたい」

なるほどね。

「じゃあ、買うのか？」

「たぶんね。年末は師匠が忙しいから相手してもらえないし」

「そうだったな」

「おっと。ミキシング終わったよ。今そっちに送るね」

そういうとあいつはドロップボックスのURLをメッセージ欄に貼り付けた。

スカイプの転送機能を使うよりもこっちのほうがファイルのやり取りは早い。

すぐにファイルの転送が終わる。

「ちよつと聞いてみる」

そして俺はダウンロードしたMP3ファイルを再生してみる。Aメロからして昼間に聞いたのとは違った。かなりのアレンジが施されている。だがそれが良かった。

そしてボイスチャットから文字チャットに切り替える。

ハッピーイルカ：おお、いいねえ。

蓬萊山蓮華：そう？

ハッピーイルカ：うむ。

ハッピーイルカ：我ながらくすぐったい歌詞だ（笑）

蓬萊山蓮華：そんなことないよ。僕は好きだなあ。

ハッピーイルカ：そう行ってくれと助かる。

蓬萊山蓮華：それに、歌うのは君なんだよ？

ハッピーイルカ：そうだった……

蓬萊山蓮華：ばーか

ハッピーイルカ：てめっ！

それにしても愛の告白の歌なんだが、やっぱりあいつの声で歌詞を聞くと恥ずかしい。

「なかなかいい感じに出来上がってるじゃん？ やっぱお前天才だよ」

音源を聴き終わったのでボイスチャットに戻る。

「そうかなー。まあ、精一杯お料理させて頂きました」

「良い料理に仕上がっていたと思うぜ？」

「ほんと？ やった」

あいつが喜ぶ。あいつは本当に喜怒哀楽が素直なやつで相手にしていると感じがいい。

「で、もちろんオケ音源もあるよな？」

「あるよー。今リンクはる」

で、数秒後にドロップボックスのリンクがはられる。

それをダウンロードする。

「さんきゅー。譜面の方は？」

「PDFをZIP圧縮してあるけど？」

「じゃ、それもくれ。全パート分」

「了解」

ということでもたドロップボックスのリンクがはられる。

ほんとうにネットは便利だ。

で、ダウンロードした音源をマイスペースとピアプロとYouTubeにアップロードする。もちろん俺たちのバンド名、Silent tearsの名義で。そしてツイッターでデビュー曲のデモですと宣伝する。ちなみにアップロードしたのはオケ版の方。歌が入ったのは後で一番の部分だけに編集してからもう一度ちゃんとアップロードするつもりだ。

「ふう、更新作業終了」

「おつかれー」

「で、明日はお前も来るの？」

「もちろん。君たちの演奏を聞くのが僕の最大の役得だからね」

「ちがいない」

俺たちは笑いあう。

今思えば、これは貴重な一瞬だった。何も考えず無邪気に笑い合える。そんな時間が。

「じゃ、そろそろ飯だから切るわ」

「あ、うん。僕もご飯」

「それじゃ、お疲れ」

「おつかれー」

そして通話を切る。

ハッピーイルカ：それじゃ、またなー

蓬萊山蓮華：ばいばーい

それから音源二つと楽譜をメーリング・リストに添付して流す。これには最近事務所の社長やマネージャーのメールアドレスも加わった。

ネットのない時代やコンピューターのない時代はどうやって音楽を作っていたのだろうか？ エーネイティブの俺には、エーがない時代の音楽作りの様子など想像も出来なかった。

そして、パソコンの電源を落として飯を食うために一階に降りていく。

飯を食い終わってからギターにヘッドホンを付けてデビュー曲と俺が作ってあいつがアレンジした曲の両方を練習する。そして二十三時頃にパソコンを付けてメールをチェック。メンバーからの返信を確認してパソコンを落とすと、パジャマに着替えて部屋の電気を消してベッドに潜った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0252w/>

ノスタルジア～刻のオルゴール～

2011年8月26日03時18分発行